

小舟城跡

<小舟城の構成>

小舟城跡は、緒川地域の小舟地区にある標高220mほどの山に築かれた山城です。小舟の吉田神社の東側に位置しています。



◀小舟城の位置

小舟城の縄張り図▶
(高橋宏和氏作図)



小舟城は山の尾根を利用して曲輪（くるわ・一定の広さをもたせた平坦部）を造り、その間の尾根を堀切や土塁を造成して断ち切り、敵の侵入を防ぎやすいように造られています。また斜面を鋭角に削って取り付きにくくするとともに（切岸）、その下に腰曲輪や帯曲輪などの武者溜りを造って敵をいったん誘い入れ、味方が攻撃しやすくするなどの防御施設も造られています。

しかし狭い尾根の上を利用して造られているため、大きな軍勢の駐屯には不向きと考えられます。

城の本丸である主郭は城の最高所に造られています。幅10m、長さは30mほどの広さがあり、北側には土塁が盛られています。主郭の北には深さ3m、幅4mほどの堀と、更に北に幅、深さともに1mの堀が連

続する二重堀切となっていて、小舟城の見所のひとつとなっています。

二重堀切の北には二の曲輪が続きます。この北にも深さ1mほどの二重堀切が作られ、北側の尾根からの侵入に特に警戒していることがわかります。

小舟城はここから南東方向と西方向に遺構が伸びています。

二の曲輪北側の▶
二重堀切



<小舟城の歴史>

小舟城は「大繩久照文書」に記されるように、16世紀前半頃には野口・東野・高部の番衆と並んで「小舟之者共」と記される人々の拠点だったと考えられます。おそらく小舟から徴発された農民が、戦時には兵士として戦地に送られたものでしょう。この文書に見える戦では烏山に送られているようです。

これまでの調査で、同じ文書に記されている野口城、東野城、高部城は、市内の山城としてかなりの規模をもつ拠点城郭であったことが、その遺構から推測できます。

昨年の調査で、有志の方々により、新たに小舟城の西側にも遺構が確認され、当初知られていたものよりも遺構が広がる可能性が出てきました。また、小舟城跡の麓にある集会所施設の一帯は、鷺子照願寺の前身の念信房（高沢氏信）の草庵があった場所と伝承されていて、中世の墓塔である宝篋印塔^{ほうきやくいんとう}などが残されています。当地がかつて毘沙堂と呼ばれていたことを考え合わせると、麓の遺構も含む広い範囲が13世紀頃の領主高沢氏の城郭の一部だったことが推測されます。

したがって、小舟城も野口城や東野城に匹敵する規模を持つ城郭だったと考えられるのです。



◀小舟城遠景

※参考文献 五十嵐雄大・高橋宏和「小舟城—もうひとつの番衆の城—」『おがわの文化』31号 H26

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450